

第 27 回京都文化芸術都市創生審議会 摘録

日 時 令和 8 年 8 月 18 日（火） 午後 3 時 30 分～午後 5 時 00 分

場 所 京都市役所 本庁舎 4 階「正庁の間」

出席委員 池坊専好会長、小山田徹副会長、井上八千代委員、岩崎奈緒子委員、太下義之委員、岡村詩野委員、奥山理子委員、坂本公成委員、建畠哲委員、細見良行委員、福田彩乃委員、松本邦子委員、松山大耕委員、屋敷陽太郎委員、吉田良比呂委員

事 務 局 平賀徹也文化芸術政策監、野口穂高文化芸術都市推進室長、
吉岡久美子京都芸大・文化連携推進部長、松浦裕之文化財担当部長ほか

1 開会

2 議事

第 3 期京都文化芸術都市創生計画（案）について

3 閉会

※ 各委員等からの発言要旨は別紙のとおり

2 議事

第3期京都文化芸術都市創生計画（案）について

太下委員

- ・ 政策部会での議論について報告する。まず計画期間について、やはり第2期創生計画の10年間は長過ぎたのではないかという意見があった。一方で、5年ごとに計画策定や見直しがあると、計画作成やその改訂に過剰に力を費やすことになるという意見もあった。そこで、計画自体を柔軟なものとしつつ、計画期間は8年程度が適当で、必要に応じて中間改訂を行うこととした。
- ・ また、文化芸術の価値や文化芸術と社会との関係性を明確にすべきだという意見があった。計画の姿勢や理念を示す第1章のほか、「みんなに開く」という視点の設定につながっている。
- ・ 資料上は視点という大きな枠組みから具体的な事業への説明になっているが、実際の政策部会の議論では、むしろ具体的な事業、こういったことをこれから京都市がやるべきではないかという観点から議論を行った。特に部会で議論になった論点や、それが反映されている具体的な事業を中心に拾いながら説明する。
- ・ まず、視点1「みんなに開く」。ここでは裾野の拡大、共生社会の実現が掲げられた。具体的な事業としては「人生100年時代に対応した市民層へのアプローチ」、「舞台公演での障害者に対する情報保障の強化」を計画に盛り込むこととしている。
- ・ 視点2「未来をはぐくむ」。ここでは文化芸術の担い手として、人だけでなくアートマネジメント人材の重要性や、彼らの働く環境が論点となった。そこで、大学や芸術センターなどの人材を育成する機関における取組の充実、アートマネジメント人材を含む文化芸術関係者の報酬ガイドラインの設定などを盛り込むこととしている。
- ・ 視点3「出会いまじわる」。昨年京都市で作成された京都基本構想でも示されている「京都学藝衆構想」について、人々の混ざり合いや学び合いの促進が大事だという意見があり、こういった場作りというものが重視されている。この流れを踏まえ、「クリエイティブ人材のレジデンスの拡大」、「コミュニティの核となる文化拠点の支援」など、文化芸術を通じた人々の出会いや交流を目指す内容を盛り込んでいる。
- ・ 視点4「いきいきと守り活かす」。これについては全国的な問題でもあるが、伝統文化の継承や文化遺産の収集・保管機能が論点となった。伝統文化を守るという保守的な姿勢だけでなく、現代に活かして発信することの重要性についても意見が出た。そこで、伝統的な用具の代替研究を行っている「伝統芸能文化創生プロジェクト」の拡充や、「京都ならではの歴史博物館機能の検討」などを計画に盛り込んでいる。
- ・ 視点5「ワクワクを創る」。ここでは、頂点を伸ばすという点、文化施設を盛り上げるための関係団体との連携強化、それから一般財源が限られる中での文化政策の財源などが論点となった。市の文化施設の指定管理者である京都市芸術文化協会や、京都市音楽芸

術振興財団等の団体とのパートナーシップを高め、指定管理料や指定管理期間を適正化することによって、トップレベルの芸術家の公演や制作の機会の充実につなげていくとしている。また財源として宿泊税をはじめとした多様な財源の効果的な活用を継続・拡充し、事業を充実させることとしている。

- ・ こうした取組や具体的な事業を議論し、先程説明があった12の重点施策を設けていく形になっている。「視点と方針」という項目で全体像が示されている。前述の議論を踏まえ最終的に「五つの視点」という形にまとめているが、政策部会のメンバーである池坊専宗委員から、「文化芸術の振興にあたって、各視点は必ずしも独立のものではなく、思いがけない形も含めて様々に混ざり合うものだ」という意見もあり、五つの視点に全て線が繋がれるような、乱雑な線で結ばれるというイメージになっている。

小山田副会長

- ・ 前回の審議会で山極委員から、文化政策を進めていく中で、自然環境との関係についての視点を入れてほしいという趣旨の意見があったが、確かにそのとおりだと考えている。
- ・ 京都には、様々な寺社仏閣が守ってきた緑や公共空間の緑などがたくさんあり、それらは文化と深い関わりがあるはずだ。例えば、緑や自然は人を選ばない。これは「みんなに開く」という視点に非常に大きく関わってくるし、伝統文化やそれを維持してきた方々の専門性などにも必ず関わってくるはずなので、何とか上手にこの文化政策の中に環境政策と結びつく経路のようなものを入れ込めると良い。
- ・ 共生社会という時に人間だけの社会を想定しがちだが、今は「マルチスピーシーズ」という考え方もあるように、自然生物全てを含んだうえでの共生社会というのを考えなければいけない時代でもあると思うので、その部分を何とか入れられないかと思っている。

松本委員

- ・ 五つの視点が「乱雑な線で結ばれる」というところが、ポイントなのだろうと思っている。文化というのは単体ではなく、色々なことを巻き込みながらやっていくもの。例えば、子どもに対する機会が開かれれば、何かを守り活かしていくようなことにもなるだろうし、子どもが楽しいと、また出会いや交わりが生まれるだろう。そういう風に、一つに限らず、色々リンクをしながらやっていくことができれば、より良くなるのではないかな。この線がすごくぐるぐると巻いたり、クリアになったりしたときに初めて、浮かび上がってくるもの、形として結実したものが出てくるのではないかなと思う。
- ・ そういう意味では、かなり重複しているような文言というか、これとこれはどう違うのだろうと思われるところもあるので、そこはもう少し整理した方が良いのではないかな。例えば「未来をはぐくむ」と「出会いまじわる」の何が違うのか。そこをもう少し明確にできれば良い。

- ・ 文字ばかり多くなると読まれなくなる。新聞も今、グラフィックやカラー、写真など、文字を少なくして、分かりやすく簡潔な表現にすることを心がけている。デジタルな世の中で、やはりそういうことをしないと頭に入ってくるにくい部分もあると思う。計画の冊子を作る時に、30 ページくらいに収めるのは非常に良いと思うし、もっと簡潔に、イラストやグラフィックに気をつかって、市民が手に取りたくなるような、イメージが湧くようなものにしていけたら良いと思う。

松山委員

- ・ 文化芸術分野に KPI を入れるのはやめた方が良い。行政的には必要なのかもしれないが、全く意味がない。人的、時間的にも、こういうことをやるのだったら、もっと他のことをやった方が良いのではないかと思う。
- ・ 最近、新人作家を選抜する褒賞金付きのコンテストがあり、2 年前と比べて去年が 1.5 倍、今年はさらにその倍の応募があったが、AI で書いたものが山程来て審査できないという状況とのこと。おそらくこれは文章が一番 AI と親和性が高いからそうなっているのだと思うが、音楽も他の創作物も、いずれそうなると思う。そうすると、コツコツ真面目にやっていた人たちではなく、AI へのアクセスが非常に良い、もしくはテクノロジーに詳しい人たちが山程応募してきて、今までの人たちがなかなかたどり着けない、そういう将来が容易に想像できる。
- ・ 京都市には 300 万円の報奨金制度（京都市芸術文化特別奨励制度）があるが、言う間に AI 作品が大量に来て、その時に京都市は誰がどのように選考するのか、どのようなアーティストを育てるのか、非常に難しい問題に直面するのではないかと思う。インタビューすると言っても誰がインタビューするのか。目の前でデモンストレーションできるようなアートであれば良いが、そうではないものもある。文章もそう。現代アートもそう。AI を排除すると言っても、今の時代それはナンセンスだし、ではこれからの望ましい、京都はこういう人たちをサポートしますよというアーティストにどうアクセスするのか、セクションするのはかなり難しいと思う。
- ・ 褒賞金等のアーティストをサポートするシステムは必要だと思うが、AI が席卷しかねない。就職活動でも、AI が書いたエントリーシートを AI が弾き、結局学歴や語学ができるか、体力があるか、ストレス耐性があるか等で選ばれる。
- ・ そういう時代になっている中で、8 年という計画期間の設定がどうなのかと疑問に思っている。3~4 年くらいでだいぶ世の中は変わっていくと思うし、その中で若手をどう育てるか、システムを作るのが難しいのではないかと思う。

小山田副会長

- ・ 他の機会でも同じようなことを申し上げたが、文化の話をするときに「戦略」という言葉が使われるのはいかなものか。例えば「京都市京セラ美術館の戦略的運営」の「戦略」

という言葉の意図は何なのか。先程 KPI の話も出たが、「戦略」というと、常に数値化に追われて、経済的な要素、もしくは勝負の世界を持ち込むための運営をしろということなのか。どういう意図でこれが使われているのかというのが気になっている。

- ・ 「新京都戦略」という言葉は市長が立てたのだと思うが、それ自体にも少し違和感を覚えている。文化芸術の世界にそういう言葉が無自覚に使うことは、ある方向性がもう示されているような感じがして、かなり危険な感じがする。「戦略」という言葉は、気をつけて使ってほしい。

事務局

- ・ 以前にも同様の御意見を伺ったにも関わらず、申し訳ない。文化の文脈に「戦略」という言葉が馴染まないという御指摘はごもっともだと思う。
- ・ 京都市京セラ美術館がリニューアルを契機に企画展を充実させつつ、現代アートも取り入れていく中で、昨年度には、一部外部に委託していた学芸部門を直営化した。これをどのように効率的・効果的にやっていくのかという点で、集客を図っていくということも一つあるだろうし、展覧会をするための資金調達も当然外せない。もちろん数字に徒に拘るだけではなく、京都市の美術館であるからこそ取り組むべきものも当然あるが、そういったものも含めて「戦略」と表現した。
- ・ 一方で、不用意に「戦略」という言葉を使っていた面は否めない。表現方法については改めて検討したい。

屋敷委員

- ・ 計画案は過不足なく書かれていると思う。
- ・ 文化や芸術というのは、アーティストの方と、それを支える財界や行政の方々、そしてもう一つはやはり健全な批評、そういったものが一体となって発展していくものと思っている。健全な批評空間の一角をメディアの一員として担っていきたい。五つの視点の様々なところで、私たちも何らかの貢献をしていきたいと思っている。

建畠委員

- ・ 文学の世界では AI が非常に問題になっていて、先程も同じような話があったが、特に川柳では応募が非常に多く、審査ができないとのこと。ほとんど AI であり、川柳系で応募できる賞がなくなっているという話も聞いた。
- ・ 囲碁や将棋では（対戦で）AI ソフトを使っちゃいけない。陸上アスリートも筋肉増強剤を使っちゃいけない。文化や芸術における AI の利用はどうか。モラルで抑制することもなかなか難しいと思うし、国際社会の中で承認されることがあるかもしれない。
- ・ そういったときに、8 年という計画期間では対応できない可能性がある。非常に短いスパンで変化し、どのような変化が起きるか分からない。変化が起きた時に、何らかの形で

対応していく柔軟性が必要。途中で計画を見直す機会があっても良いのではないか。計画期間は基本的に 8 年で良いと思うが、状況に合わせて変更していくということを頭の中に置いておくべき。

- ・ 「戦略」という言葉について、重要な問題提起だと思う。

細見委員

- ・ 美術館を運営する者として、京都市がこのような取組をしてくれるのは大変ありがたい。コロナ禍が終わってからまだ歪みが残っており、大変な状況である。
- ・ ヨーロッパ等と比べ、日本は小学生の芸術鑑賞の機会が全くない。小学生の間に先生から絵の前で説明してもらうなどしていると将来の「習慣」ができるのだが、日本はそういうのが全くないので、中学・高校生がなかなか美術館に来ないというのが現状。細見美術館ではアートキャンパスシステムという、学校と連携し、学生証を見せてくれたら無料で入館できる取組をしているが、それでも学生が来ない。
- ・ 裾野を広げることは良いことだと思うが、なかなかうまくいかない。開館当初の頃には、京都市に「小学生に開放しますよ」という話をしたこともあったが、それもなかなか実現しなかった。10 年くらい前に学生を連れてきて（作品の）説明をしたら、「うるさい」と言われてしまったことがある。人生 100 年を豊かに、ということでお年寄りも美術館に来るようにとされているが、そういった年代の方々は静かな鑑賞を好む傾向があり、ギャラリートークができない。
- ・ 寛永行幸四百年祭のようなイベントは、一般市民に関心を持ってもらう良い機会である。

奥山委員

- ・ 京都市の事業や文化政策を知っている市民がどれくらいいるのだろうかということも常に考えなければいけないと思う。同時に、とりわけ文化芸術というのは、自治体（体制）から距離を置いたところで表現・創造してきたアーティストたちによって支えられてきた部分も多々ある中で、私たちがこの場で議論して作り上げている計画にリーチできていない、距離を取っている表現者や実践者にも視野を広げながら、この計画を作っていく必要があるということ、自分自身にも戒めながら説明を聞いていた。
- ・ 今、日本で様々な災害が起きており、これからの 8 年間、コロナではないにせよパンデミックのようなことが起こらないとも限らない中で、計画で推進していこうとするポジティブなメッセージだけでなく、非常時にまちが機能を失いかけるといった状況の時に、文化芸術に何ができるかということも、常に意識した計画も考えておくべきではないかと思う。
- ・ 非常時に文化施設同士が連携できる仕組みであるとか、アーティストや文化芸術に携わる方々が、制作や仕事が継続できないような状況になった時に、相談に行き、適切な資源

を利用・活用することができるといったことについても、きちんと明示しておけると、京都市で活動が続けられるという後押しになると思う。

- ・ 京都市には HAPS も含めて、たくさん相談窓口があるというのも、全国的には稀で特徴的なことだと思うので、伝統を継承するだけでなく、生活や暮らしという部分を守っていきけるようなメッセージも添えられるとより魅力的な計画になると考えた。

坂本委員

- ・ 私は京都市芸術文化特別奨励制度の審査員もやっているが、舞踊の若手の申請が年々減っている気がする。実演家の数が減っていて、かつ東京に非常に集中しているのがデータでも明らかだが、私自身の経験から見ても、実力があり良い視点を持っている、カンパニーを運営するくらいの力量があると思っていた若手が東京へ行ってしまう。40～50 代あたりの人材が払底してしまっている。もう少し底力があって、地域・京都市に貢献したいという若手を育てていこうと思ったら、基礎教育をもっと充実させた方が良い。
- ・ 京都造形芸術大学（現京都芸術大学）に舞台芸術を教える学科があった。例えば政策部会委員の木ノ下裕一さんや、倉田翠さんは、まつもと市民会館芸術監督をやっているが、2 人とも同学科の出身。大学でかなり基礎をしっかりと学び、プロとしてやっていく厳しさを身につけ、底力をつけたのだと思う。しかし、学科としては今はミュージカルなどに軸足を置いているらしく、京都市でハイアートと言うか、アートの舞台芸術を教える大学が皆無という状況。
- ・ 韓国には高校から舞踊科があり、それも伝統芸能を学ぶ専攻とコンテンポラリーな現代舞踊を学ぶ専攻とが併設されていて、舞踊教育が充実している。日本にはそういう教育の場がない。もし京都でそういう場を作ることができたら、日本国内のダンス界や舞台芸術界に、かなり強いアピールができるのではないかと考えている。

福田委員

- ・ 私は京都市立芸術大学で非常勤講師をしているが、卒業した時にどうやって社会と関わっていったら良いか、具体的に思い描けていない学生が非常に多い。
- ・ 先程松本委員から指摘があったように、文字ばかりだと分かりづらい部分もあると思う。若者たちが「こういうのがあったんだ」と興味を持ち、もっと知っていきたいと思えるような発信ができれば、若者たちも社会とどう関わっていったら良いのかが自主的に分かっていくのではないと思う。
- ・ 文化芸術に触れ、そこにどのような方が関わって、どういう流れがあって、そういう機会が生まれているのかということを、実際に体験してみないと分からない。そういう経験があるから、自分がどのような道に進んでいきたいのか、演奏する側に行くのか、マネジメントする側になるのか、色々と考えて、進む先が分かってくるのではないと思う。優秀な学生が大学にもたくさんいるし、もっと頑張りたいと思っている方がいるので、そう

いう人たちに分かりやすく伝えられると良い。

岩崎委員

- ・ 本日印象に残ったのが、「戦略」という言葉を使うことが大丈夫なのかという話。これは非常に重要な問題で、非常事態・異常事態が起きた時を念頭に置く必要があるという指摘にも関わることだと思う。つまり、文化芸術とは何なのか、なぜこのような計画を立てるのかという問いを、どこかでしっかりと持っておく必要があるということ。それは計画の第 1 章の最初の部分になると思うが、京都市として文化芸術をどのように考えているのかという宣言、メッセージが重要になってくると思った。
- ・ 計画期間について 8 年間で適切なのかという議論があった。先程も就活のエントリーシートの意味がなくなっているという話があったように、時代がものすごく早く回っているので、8 年後に今のような社会ではない可能性は非常に高い。しかし、やはり京都市として柱をしっかり作って、その 8 年の変化をしっかり見ていく、それに基づいてまた次の計画を積み上げていく中で、その計画がどうだったのかということをしっかり見極めるうえでは、必要な時間なのではないか。
- ・ 私は文化財行政にも携わっているが、文化財の行政計画も総花的なもので、審議会でも色々な報告が上がってきて、京都市の方もそれを作り、中間的に検証するので精一杯といった状況で、何のための計画なのかと率直に思う。
- ・ 今回重点的に取り組む項目を示し、8 年間で何をしてどう変化したか、それを踏まえて次どうするかということで、これまでとは少し違う取り組み方かもしれないが、とりあえず 8 年間やってみて、それがどうなるのかというのも、計画の妙味というか、良い部分ではないかと思う。
- ・ 9 月 1 日に政策部会がある。部会委員として、先程の自然の話など、どうやって組み込むか、頑張って議論する。

井上委員

- ・ 多岐にわたることをまとめていただいているが、先程もあった、環境や自然との共生のことをどこかに入れてほしいと本当に感じる。
- ・ 文化とか芸術というものを、どのようにして市民の方にも分かっていただけか。文字だけでないよう工夫するということもあると思うが、もっと日常に即したこと。例えば京都であれば、普段建仁寺の中や八坂神社の中を歩いていくなど、もっと様々なところで、暮らしをしている中に文化というものがあるということを、何か実感としてあるものを、表現できないか。
- ・ 8 年と言うが、1 年間少し通らなかつたら、まちは大きく変わってしまっている。これが何よりも恐ろしいと最近感じている。そのため、そういうことを何らかの形で入れられないかと思う。

池坊会長

- ・ 自然環境と文化の関連性、そして文化を数値や効果だけで測ることの是非について、様々な意見があった。行政は分かりやすく説明するために数字が先行しがちだが、京都は千年の都ならではの長いスパンで、深い視野と懐の深さを伴い、そして地球規模の大きなスケールでの捉え方で、計画の策定に関わっていかれたらと思う。

吉田委員

- ・ 自然環境の視点については、しっかり位置付けていく必要があると考えている。先日五山の送り火があり、市長からも指示があったのだが、送り火を実施するうえで必要なアカマツが不足しており、育成していかなければならないが、今から植えても使用できるのは50年先。長い視点を持ってやっていかなければならないのだが、アカマツの育成は農林の仕事、送り火は文化財の仕事、と縦割りになっている。しかしこれでは、育成と文化をつなげることができなくなるため、縦割りを排して横ぐしを刺すことが必要。
- ・ 今回の計画は、京都基本構想・京都学藝衆構想の根幹をなす計画でもある。本日市長が東京で講演している内容にも含まれていると思うが、これから、観光だけではない創造的な滞在を受け入れ、地域の方と交流して、多様な京都に触れていただくことを目指す。
- ・ KPIのお話もあった。行政の立場としては、多くの方に施策を分かっていたくためにはKPIを示すことが必要なのだが、文化と馴染むのかということ確かに難しい。
- ・ これまでの計画は理念に捉われ、硬い感じで、計画を作ることが目的になってしまっていた。今回、実務的な計画にするとやっているのは、策定して自己満足するのではなく、何をめざす計画なのかを明らかにし、何よりその実現を目指していくということ。事業数をこなしていくというのではなく、例えば舞台芸術の若手が生活する土台ができているのか、しっかり育成できているのか、そういうところもしっかり見極め、そこに繋がるものになっているのかを見ていかななくてはいけない。8年間の中で、中間改訂の有無をあえて明記しないのは、政策部会において、時代に応じた形で実効性があるのかをしっかりと見極めていくということをお話いただいたゆえではないかと思う。
- ・ 子どもや無関心層に対しては、ようこそアーティストや伝統文化体験授業もやっているが、これに加え、中学校の部活動の地域展開を令和10年度から実施する予定。教員の働き方改革だけではなく、子どもたちが多様な経験をできる機会になる。スポーツか文化かの二者択一ではなく、普段スポーツをやっている子が月に1〜2回は文化に触れることができるなど、いろんなことができる仕組みになる可能性がある。美術の鑑賞をする時間も学校が希望すれば設けることもできる。文化芸術の部署だけではなく、教育委員会や学校現場も交え、いただいた意見をフィードバックさせていただき、裾野の拡大、特に多感な時期の生徒たちに多様な経験をさせるということもできるかと思う。教育の現場にも伝わるように努力していきたい。

- ・ 文字が多いというのは、京都基本構想の時にもいろんな方に御指摘をいただいた。今回の計画にあたって活かしていきたい。

(以上)